

ふたりで奏でる音

中三

んだりすることもあった。

でも、彼との出会いが私の気持ちを少しずつ変えていった。彼は、とても丁寧にピアノを教えてくれて、私が間違えてもゆっくり繰り返し教えてくれた。教え方だけでなく、私のペースに寄り添ってくれるその姿勢はとても優しかった。私が、特別支援学級に行つて声をかけることもあれば、

私には、ある大切な友達がいる。

彼は、特別支援学級と私のクラスに在籍していましたことがあり、授業と一緒に受けることがあつた。

彼は、ピアノが好きで休み時間に一人でよく弾いていた。楽しそうに鍵盤に向かう姿が印象的で

私は何度もその様子を遠くから見ていた。ある日、思い切つて話かけてみた。

「その曲どうやつて弾くの。」

と。すると、彼は照れたような表情を浮かべて、

「教えてあげるよ。」

と笑つてくれた。

その日から私は、彼にピアノを教えてもらうようになつた。

特別支援学級とは、小学生の頃からよく交流があり、私はどこか優しく接しなければいけないと身構える気持ちがあつた。優しくするという言葉の裏に、「相手は特別だから」と無意識に線を引いていたのだと思う。少し緊張したり、言葉を選

「ピアノを弾きに行こう。」

と誘つてくれたこともあつた。

ピアノを通して同じ時間を共有し、楽しむ。そこにあるのは「支援」や「配慮」ではなく、人と人との繋がりだつた。そして、彼は私にとつて「特別」ではなかつた。ピアノを通して出会つた大切な友達。その思いが変わることはない。

それから私は特別支援学級の友達にも、自然な気持ちで話しかけられるようになつた。気を遣つて距離をとるのではなく、仲間としてできることや好きなことを一緒に楽しむ。そんな関係が当たり前になつた。

人と人との間にあるのは、何かができる、できないという線ではなく、私たち一人一人がどのよ

うに相手と関わろうとするかということだ。その姿勢によつて関係は大きく変わつていくのだと彼らとの日々が教えてくれた。

また、彼にひと言、「ピアノを教えて。」と声をかけたことで繋がり、私たちはお互いを理解する時間をもつことができた。もし彼に話しかけていなかつたら、どんな人かよく分からぬまま終わっていたかもしれない。ほんの小さなきづかけが誰かと心を通わせる扉を開くのだということを実感した。

学校には、いろいろな生徒がいる。それぞれに得意なこと、苦手なこと、好きなことや個性がある。見えやすい違いもあれば、見えにくい違いもある。その違いを特別なものとして線を引くのはなく、自然なものとして受け入れていくことこそが人権を尊重するということなのではないだろうか。そして人権とは、単に誰かに優しくしたり、何かを与えたりすることではなく、「その人がその人らしくいられるように、一人一人ができることを考えること」だと思う。何か難しい知識やスキルがなくても、話してみると、知ろうとしてみる気持ちが大切だ。そういう気持ちがあれば、

きっと人と人との間にある壁は少しづつ低くなる。

今でも、彼と過ごす音楽室での時間はかけがえのないものだ。ピアノの音が重なつて一つの曲になるように、私たちも違いを認め合いながらお互いの個性を生かして生きていくらしい。私は、彼から教わったことを忘れずに、人と丁寧に向う合える自分でやりたいと思う。